

初等部

初等部 2023 年度教育活動

初等部長 高橋出

5月の連休後にコロナ感染症による行動制限がなくなったことを大前提に学校運営、教育活動を行える嬉しさと感謝の1年だった。一方、初等部の生活は子どもたち自身が上級生から学ぶことが本当に多い学校であると実感した。

私たち教員は、この教育活動が続けるのか、止めるのか、新しくするのか、を問われることが多々あった。初等部創立 96 年の伝統の上に 100 年をどのように迎え進んでいくのかを考えることができ、初等部の未来を感じる1年であった。

I:キリスト教精神に根ざした人間教育

一人ひとりを大切に

礼拝は、月1回程度の学園長礼拝、後藤田先生には、各学年で一回、普段は担任が工夫して行った。担任が今、子ども達に話したいこと伝えたいこと、読み物などを通して子ども達はキリスト教的価値観に触れた。クリスマスは全校体育館に集まってイエス・キリストの誕生を祝えた。教職員のキリスト教の理解を深めることは毎週会議の最後に引き続き行った。普段、聖書やキリスト教についてじっくり考える事が少ない初等部にとっては大変、貴重な時間である。また保護者には保護者会、初等部だよりでキリスト教の理解を深めていただけるように以前より意識して伝えた。

II:一人ひとりのケアと尊重

教育相談コーディネーター中村の役割を子ども、保護者、教員も理解し、一人ひとりを大切にする初等部の支援体制によって問題や課題解決、解消できることが多くあった。毎週の支援会議は子どもの情報共有と理解を深めるための重要な時間となっている。学級全児童個別面談、懇話などお互いを尊重する意味を考える機会を捉えつつっている。子ども、教員、そして保護者のケアも必要な時代になっている。一人ひとりのケア、尊重について模索し続けている。子ども一人ひとりが違うように相談、サポート内容も同じものではなく、常にまず状況を把握してチームで当たっている。

III:学習する学校、生活即探求

コロナ禍の制限がほぼなくなり、行事、授業を元に戻しつつも昨年度に引き続き新しい学習の形を模索する雰囲気は教員の中に高まっている。一斉・グループ・個別・教室外と本来の初等部の多様な学習に更に自由進度・縦割り・発表・探求などより子どもが自ら学べる楽しさを味わえる環境を整えようとしている。学びの発表会も3回を重ね、子どもも教員も当日のイメージを持って準備できた。多くの保護者に来校いただき、活気のある学びの発表会を開催でき、子どもたちはもちろん私たち教員も達成感を感じられようになっている。今年度も更に充実した初等部の学びのスタイルを伝えていきたい。

初等部の教員以外の卒業生、男子部高等科3年生、最高学部先生、十三浜のワカメ作りなど初等部の教員以外の方の協力をいただき、特徴ある学習が行えた。教員の役目が「教える」に終始せず、時には伴走、コーディネーター的な立場で子ども達の探求できる環境を今後も整えたい。教員も学び続ける為に成田喜一郎先生、増山均先生を講師に迎え研修を行った。増山先生は羽仁説子が会長であった日本子どもを守る会会長であり、子どもの権利、子ども期の保障についてお話を伺う貴重な時間をいただいた。子どもをひとりの人間としてという認識ではいるが、実際の学校生活、教員の言動、行動を見直す重要性を痛感した。

Ⅳ:よりよい社会の小さなモデルとしての学校

2年目の4, 5, 6年選択制運動、サッカー・バスケット・パルクールと体操・ジョギングの中でサッカー、バスケット、パルクールは外部講師の指導の体制が整った。サッカーとバスケットいずれも子ども主体の指導を重視していて、初等部が推し進めていきたい学びの方向と一致していることは子ども達にとって良い環境が整えられ嬉しい。また、パルクールは男子部卒業生の鈴木正信氏の指導が今後も継続できる体制が整いつつある。ビデオレターのみではあったが、マレーシア難民の子ども達の交流も3年目を重ねた。2020年度よりスタートした希望する保護者による登録制食事作り、ファミリースタッフ(通称ファミスタ)制度で家庭弁当の回数を大幅に増やさずに、続けられているが、希望する保護者が少なく当番組に苦慮する月も増加している。根本的な対策が必要なのか検討したい。全校児童懇話、対話する活動が行えた。実社会は異年代で成り立っている。社会に出て初めて知るのではなく、子ども時代から年上と年下とのコミュニケーションを日常の中で伸ばしたい。異年齢で対話する学校文化が根付く手ごたえを感じた。

Ⅴ:教育環境の整備、働き方・休み方

JIS規格が変更になった教室用机・椅子は、3年生まで使用している。机の面積も広くなりサイズが大きくなったため、教科書、学習道具が置きやすくなった。念願の第3校舎トイレ増設、改築、安全面に配慮した階段付近改修はありがたい。そのほか池の改修工事、木の伐採なども行えた。教師の働き方については年間出勤カレンダー作成により残業時間の減少、忙しい中にあっても計画を立てた仕事を意識して働きつつある。また打刻することで個々人でも初等部としても仕事の仕方に変化が現れてきている。会議は対面となり意見交換、検討、決定などスムーズに結論を導けることが増え、教員の一体感が増した。2022年度から5, 6年はひとり一台タブレットが学習道具として加わった。しばらくは5年生以上の家庭管理にして適切に学習に活かしたい。想定内、外の検討課題についてはほぼ毎週会議をとり、試行錯

誤しながら引き続き整備していきたい。総務から毎週月曜日、ICT担当職員が加わり現場の教員としては心強く、更に積極的にiPadのより良い使い方について検討できる。BLEND導入により個人成績、事務処理が進みつつあり年度末、春休みの業務が簡略化され教員の負担感がかなり軽減した。引き続き業務の見直しは少しずつだが、教員間で吟味をした上で変えられることはすぐ変えていく方向で進めている。教員同士の親睦を深める機会が数回あったが今後も教員の心身の安定につながるような交流を色々な形で図りたい。

Ⅵ:新しい広報・教育内容の発信

苦心した制約のある教育内容発信から制約のない広報活動がもたらされた。常任理事の景山さんと定期的なミーティングを重ねて「自由学園の教育について」A41枚の文章をまとめ学内、学外相談会を通して自由学園の目指す教育について強く訴えることができた。広報室初等部担当藤原さんが新企画、地域とつながるイベント、幼児教室訪問や初等部をよく知りたいということから毎週火曜日でできる限り初等部で過ごすなど、新任にも関わらず、初等部広報についても相談の時間が今までになく確保でき、初等部のために有効な力を注いでいただいた。来校のみになった学校説明会では児童がつくるというコンセプトのもと、子どもが主役の会を開催しようと6年生と担任と広報担当と相談しながら作り上げる事ができた。出願者数はもう一歩伸びず残念であったが、説明会は教育発信の最大の機会と考えている。子どもが主体的に学習、生活する学校を目指す自由学園初等部の教育の一端と考え、今後も他校にはない説明会を続け出願者の増加を目指したい。雑誌の取材の依頼も2件あり、部長、教員と保護者、児童のインタビュー記事が掲載された。新しく2幼児教室の来校を機会に、新しい関係も築けた。来校ばかりでなく外部へ出かけていくことが必要であることは実感している。

学校としての肝である教育内容発信は「学びの発表会」によって今までにない規模で実現できた。

半日ではあったが各教室、体育館、食堂にとどまらず校庭までもが会場となり、半年近く、それ以上時間をかけて子ども一人ひとりが学んできたことを自分の言葉でアウトプットできた。子どもが主体の探求的、永続的学びを推し進めた初等部教育の行く先を実感できた。そして何より保護者をはじめ一般の方々にも知っていただき、大変活気に満ちた、子どもも保護者も教員も活き活きと学ぶ楽しさに溢れた初等部となった。そのほか美術校内展覧会も行い、初等部の美術教育のレベルの高さを再確認できた。

VII: 経営基盤とネットワーク 永続的發展を支える組織構築

幼稚園からの内部進学者数は7名出願、進学した。中等科への進学者数は21名と近年で一番多かった。共学化となる中等部に多くの初等部出身者が進学したのは嬉しい。コロナ禍の初等部の教育にも満足いただけ、中等部の教育発信も各家庭に届いたのではないかと思う。この4月全児童数は195名で始まった。初等部定員確保に向けて課題は多いが、前項でも述べたが昨年度2学期より初等部出願数増を目指して、常任理事の景山さん、R.SENSES の山下さん、広報本部、初等部教員清水さん、山内さんらとミーティングを重ね、目指す初等部教育についてまとめられた。今後は具体的な広報活動について引き続きミーティングを重ねる。また、小泉さんには新入生保護者数人にインタビュー取材をお願いし、保護者が何を初等部に期待しているかを知ることができた。

設立96年目、初等部は2組制の検討を始めた。ひと学級担任制から担任2人制の2年目、よりいねいな子ども達の学習、生活の成長を見守っていく体制を整えた。この2人担任制は今後、子どもの人数減少が明らかな都心の児童数確保を視野にいたした施策である。公立小学校はひと学級35人政策を打ち出した。35人という数が私立小学校にとってどのような影響があるのか動向を注意深くみながら2人担任制、ひと学年2クラスについては経営と現場の双方で検討を続けて安定的、かつ発展的学校経営のために、さらに自由学園初等部らしい学校創りを加速させたい。

VIII: アフタースクールについて

JYU アフタースクールが設立して11年目。

4月はマスクをつけて遊んでいる子どもが多くいる印象だったが、夏至に向かって1人2人とマスクを外しはじめ、屈託のない笑顔がよく見えるようになってきた。大きな声で笑う、おしゃべりしながらおやつを食べる、じゃれ合う、子どもたちの日々の営みが戻ってきた喜びを噛み締める1年だった。

アフタースクールの会員数は181人(中高大学生10人含む)。初等部の在籍人数に対する過去最大の割合。今年度は新しいおけいことして「バルクール」が始動し、「サステナ部」の活動は次のステップへ向かって幕を閉じた。23年度末に実施した保護者・児童アンケートでは、全設問平均89%がポジティブな印象を受けているという評価。また、保護者連絡や決済まで円滑に進められるICTシステム「CoDMON」を導入したことで、子どもと向き合える時間の創出につながった。

今年度は、開設初期から取り組んでいる、部を超えた子どもたちの交流にも力を入れた。幼児生活団幼稚園の預かり保育(かるがも)の子どもたちとの交流をはじめ、高等科生のボランティア受け入れ、中高生も参加できるプログラムを企画。数年前からはじめている中高大学生向けのおけいこ(ピアノ・お花のこよみ教室)は3人増えて10人の生徒・学生が通っている。さらに、高等科のインターン「飛び級社会人」プログラムで高等科2年生の2名が11月～2月まで定期的に来てくれた。

コロナ禍を経て、大人たちが経験してきた「当たり前」を問い直して、子どもの姿や声から放課後の生活環境を考え、非常勤講師もあわせた20人強のスタッフと創意工夫してきた。今後、コロナ禍で消極的になっていたみらいかんの活用をはじめ、社会と学校をつなぐ取り組み、世代を超えて関わり合える場づくりをさらに発展させて行きたい。



VIII-I : のびのびと遊ぶ放課後



VIII-II : スイカ割り



VIII-III : 4 年生が 1 年生へ教えてくれている様子



VIII-IV : 11 年ご一緒にスタッフを見送りに駆けつけてくれた子どもたち(中高生含む)



VIII-V: 高等部 2 年生の飛び級社会人インターンの取り組み



VIII-VI: 1-2 学期に実施した「暮らし」をテーマにした様々なワークショップ。卒業生や研究者をはじめとした市民先生に教わった。